

中国・四川大地震12日で1年

【北京＝尾崎実】昨年五月に発生した中国・四川大地震から十二日で一年。多くの校舎が倒壊した被災地で日本人建築家が小学校の再建に取り組んでいる。一日も早い開校を目指し、高い耐震性に加え工期を短縮できる工法を採用する計画だが、金融危機の影響で資金集めが難航、施設の半数で着工のめどが立たない。「安全な校舎で学ばせてあげたい」。児童の思いをかなえようと支援を呼びかけている。

再建計画を進めるのは、北京を拠点に活動する建築家の迫慶一郎さん（38）。きっかけは昨年五月、中国のテレビ局が放送した被災地の映像だった。「本来、避難場所になるはずの学校が真っ先に崩れ、子供たちが犠牲になるという現実と言

葉を失った」

四川大地震で倒壊・損壊した校舎は七千四百棟。校舎を被災地に造ること「自分の使命」と思い至る。今できることを自

被災地に安全な学校を

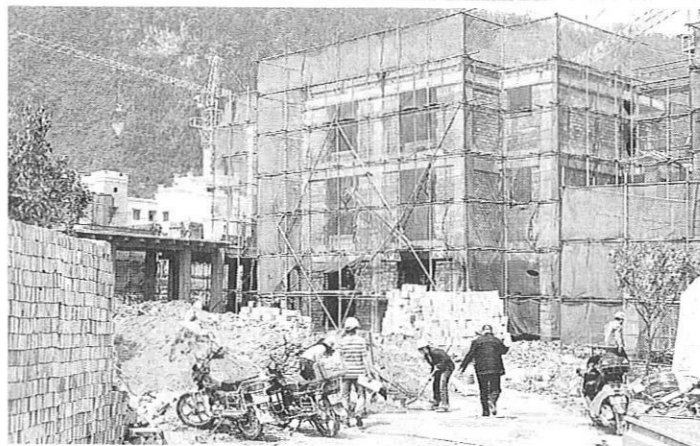
問し続け「地震大国・日本の耐震技術を生かした校舎を被災地に造ること」に壁で建物を支えること

った。地震発生から約三週間後、設計した図面を手に被災地へ。地元当局との協議で、綿竹市の春小学校の再建を進めることが決まった。

で耐震性を高める工法を採用。工期を短縮できるうえ、断熱性能の高い建物が造れるという。円形の中庭を取り囲むように各校舎を配置した設計には、原始的な集落をモチーフに「集まって生活す



小学校の模型を示し、「子供たちを安全な場で学ばせたい」と話す迫さん（4月、北京で）



被災各地では小学校校舎の再建が急ピッチで進む（四川省北川県）

日本人建築家が再建計画

金融危機で難航

るこの意味を学んではほしい」との思いを込めた。新たな学校は「春風日中友好小学校」と命名、十ニクラスの五百四十人が学び予定だ。

総事業費千六百万円（約二億二千六百万円）のプロジェクトに、当初は日中の多数の企業が支援を申し出たが、世界的な金融危機が直撃。寄付の中止や減額が相次いだ結果、不足金額は八百五十万円に上った。七月末までの完成を目指す普通教室六棟を除き、図書室や音楽室など残りの計画は宙に浮いた。

写真 戸田敬久

大塚商会
03 3264 7111